2023年度事業報告

保全団体サポート事業

【相互交流の場の創出】

2023年秋、第28回全国棚田サミットが和歌山県那智勝浦町で開催され、特別分科会「棚田の守り人ミーティング」で当団体の中島名誉代表がコーディネーターを務めました。

棚田連絡協議会からの受託事業として、９年目となる「エコプロ2023・日本の棚田共同展示コーナー」の主管・制作を担当しました。出展した11団体・地域のブースの訪問者は三日間で約1500人。「棚田・里山酒めぐり」では13地域21種の“棚田酒”が集合し、有料試飲は900杯近くとなり、リピーターも多く大人気でした。恒例の「ナイトセミナー」では出展団体相互の交流もでき高評価でした。また、今回初めて「つなぐ棚田遺産・オフィシャルサポーター」のコーナーを設置し、棚田を応援する企業が関わる機会を設けました。

首都圏で“棚田”について総合的に発信できる、またとない場です。今後もさらに充実させていきたいと思います。

都市住民向けの普及啓発事業

【川代プロジェクト】

新型コロナもほぼ終息し、参加者も例年並みに戻り無事川代の体験イベントを終了しました。川代棚田は「つなぐ棚田遺産」に認定されたこともあり、オーナーも増え賑やか。当会の田んぼでは田植え・稲刈りとも約20名の参加者で熱気溢れる活動となりました。田んぼは例年になく猛暑と水不足が続きましたが、ポンプによる用水の確保対策等で例年並みの収穫となり、収穫祭にも参加しました。

【恵那地区・棚田ビオトーププロジェクト】

今年も粘り強く活動を継続しました。

・５月26日（金）　田植え　参加者22名
・８月５日（土）　こどもビオトープ観察会　受け入れ先の都合により中止
・９月23日（土）　稲刈り　参加者１名
・３月20日（水・祝）　第17回かえるの卵を探そう！　参加者17名（大人７名、子供10名）

【石部プロジェクト】

田植え体験（５月）と稲刈り体験（10月）の両一般参加のイベントを開催しましたが、今期は集まりが悪く、特に稲刈りは人数が足りなくて作業が大変でした。畦切り11名、代かき７名、畦塗り８名、田植え14名、草刈り（７月）６名、（８月）４名、稲刈り10名のボランティアが参加しました。全体的に参加者が少ない年となりました。

2022年度は実験的に無肥料・無農薬で栽培した結果、100kgの収穫となりましたが、2023年度は再び化学肥料での栽培に戻し、収穫量は189kgと倍増し、ボランティアの有志とスタッフの頒布米も増量できて、エコプロ2023での販売にもまわすことができました。

【入門・活動紹介イベントなど】

《エコプロ》　エコプロ展が東京ビックサイトで12月に開催され、棚田ネットワークも「日本の棚田共同展示コーナー」にブース出展しました。ブースでは、旧暦棚田ごよみ・全国棚田ガイドの販売や棚田NAVIの紹介、つなぐ棚田遺産の啓蒙などに努めました。また、各地の棚田保存会の若い人達や都市住民及び農業関連の企業との情報交換に寄与することが出来ました。

《まちの先生》　新宿区の環境学習イベント「まちの先生見本市」に出展しました。会場の新宿中央公園では色とりどりの屋外テントブースが並び、当会のブースでは、竹筒を使った稲穂の脱穀体験や棚田の書籍・棚田ごよみの販売などを行い、お子様中心とした来場者との交流を深めました。

環境学習資料集『〝まちの先生〟環境学習プログラムガイド』に当会も応募掲載しました。

【旧暦棚田ごよみプロジェクト】

令和６年度版でプロジェクト12年目をむかえ、一般販売は約800部前後と例年程度の販売でした。４年目になる㈱環境指標生物の名入販売は今年も900部の制作。環境指標生物のメンバーが会報のコラム連載をしたり、社長が石部棚田の作業に参加したりと、旧暦を通して連携を広げることができました。

【棚田ＮＡＶＩプロジェクト】

「つなぐ棚田遺産」の東日本エリアで44ヶ所の棚田情報を新たに公開しました。この中には北海道と秋田県の棚田も含まれており、棚田の無い沖縄県を除く全都道府県の棚田を網羅する充実したサイトとなりました。また累計掲載地は約270件となり、能登半島地震による調査自粛地域についても継続対応となっています。スポンサー営業については取り組みできませんでした。新規スタッフ１名を新たに迎え、地方在住者や学生を含め７名の編集協力がありました。

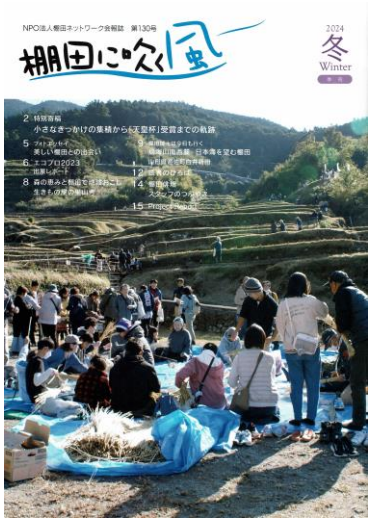
企業・団体向けの普及啓発事業

【ＣＳＲ活動サポート事業】

社会の環境意識が高まっても企業の景況感は改善されておらず、具体的なＣＳＲ活動になかなか踏み出せない状況と思われ、新たな動きはありませんでした。

組織運営について

オーソドックスな会員制度の維持はなかなか難しい時代ですが、安定的な事務所運営の維持とＮＰＯ法人としての基準に則った組織経営に努めました。



【広報・Web】

会報の特集「棚田の〈再生〉プロジェクト」「棚田米のブランド化の今」では、棚田の再生や棚田米のブランド化の新しい動きを伝えました。また「ありがとう！岩首談義所」「特別寄稿 ： 天皇杯受賞までの軌跡」では、地域で活動する会員の声を反映することができました。WEB は特筆事項はありませんが、コンスタントにFacebook の更新を行いました。